



CONTENTS

- ヒメウラナミジャノメ
—— この凡種の非凡さ
- 矢作川観察ノート(13)
- 平戸橋周辺の自然観察(3)
- 筏下り・歩け歩け・矢作川クリーン作戦
- 今月の一枚
- 研究所の調査風景

7
2001 July
No.39

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028
homepage <http://www.hm.aitai.ne.jp/~yahagi/index.html> e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

*Rioはホームページ上でもご覧になれます

ヒメウラナミジャノメ —— この凡種の非凡さ

田中 蕃

自然環境調査をするのは私たちの仕事みたいなものだが、未知の発見や新知見のある良い成果を出したいのが人情である。しかしそんな望みがかなえられるのは、むしろ珍しい。

矢作川「都市ブロック」の河辺環境調査もそうであった。昼間の昆虫調査で、チョウは一番目につきやすい生物である。種名の即断もできる。データも集め易い。どこでも個体数の多い種がすぐ分かる。個体群生態学では優占種というが、一般的には普通種という通りがよい。とにかく平々凡々の種なので「凡種」ということにしておこう。

矢作川の河辺には、どこに行ってもヒメウラナミジャノメという凡種が生息する。もともと里山の林縁や疎林に多い種との強い認識はあったが、河辺での余りの多さに認識の裏に潜む種特性を忘れてしまったのかもしれない。河辺の植生が二次林的な経緯でできている

ことの証拠も河辺植生調査で見出だされた。その時は感動的だったが、この凡種は河辺の木の無い草地にもいるので、それも忘れてしまった。

昨年度、矢作川「都市ブロック」(越戸ダム堰堤～竜宮橋の間)での5年間の昆虫調査の総まとめを行った。そして、都市の中に川と緑を復元させた児ノ口公園の自然度は河辺とどう違うのか、という着眼点を得た。比較して驚いた。矢作川の「凡種」が、かたくなに児ノ口公園に入ってきていないのである。二次林的環境生息種の本性は、そこからはみだしを拒否するのだろう。ひ弱なチョウに、種の強烈な個性を見た。この種が児ノ口公園に入った時、初めてこの公園は当初の設計どおりに自然公園としてのステータスを得るのである。凡種の非凡な語りかけであった。平凡な生き方への私たちの感性が試されている。

(たなか ぼん、豊田市矢作川研究所 総括研究員)



ヒメウラナミジャノメ

河川の自然管理と放置管理

新見幾男

河口から43km地点あたりの矢作川右岸に、お釣土場という奇妙な名称の川の瀬がある。深い淵が瀬に変わって、それが次の淵に落ち込むまでの早瀬である。その上流側の半分は瀬と淵の中間のような区間で、釣り人たちに中瀬などと呼ばれている。早瀬と中瀬を合わせ約700mの延長があり、アユが良く釣れる。

川で土場といえば、舟運時代の川港のことである。筏で運ばれた材木の陸揚げ場所や川砂利の集積地も土場と呼ばれた。舟運も筏下りも砂利採取も過去の産業になったが、各所に土場跡が残っていたり、土場の名称が川の瀬の名になっていたりする。

豊田市越戸町地先のお釣土場の名称は、ごく近年に付けられたものだろう。現地には川の産業時代の土場跡が残っているのだが、それらの土場の名称が忘れられ、アユの釣り人の誰かが気まぐれに「お釣土場」と呼んだのが始まりで、現在の名称が使われるようになったと思われる。

お釣土場の上流側半分(約400mの中瀬区間)の水辺は高木・中木・低木・下草を複層的に管理している水辺公園である。最近まで竹林に覆われていて、外部からは高木の梢が見えるだけだった。豊田市河川課が河川管理者(愛知県豊田土木事務所)の許可を得て竹林を間伐し、高木や中木を避けてはカーブあり起伏ありの園路を付けた。今後、矢作川兩岸に近自然型の水辺公園を整備する場合の「見本園」と位置づけられている。春夏秋冬の花々や虫、野鳥たちが見られ、近隣市民の評判がよい。

さて、お釣土場の下流半分(約300mの早瀬区間)の水辺のことである。そこには延長200m近い入り江(ワンド)があって、入り江は下流へ行くほど幅が広くなり、下流端で大きく口をあけて矢作川につながっていた。上流端は先細りになり、ブッシュの中に消えていた。

このあたりの矢作川は北から南に流れている。南北に細長いワンドの西側は堤防で、その斜面は竹林である。ワンドの東側が矢作川本流で、ワンドと本流の間に川原があり、そこはヤナギ、ノイバラ、ヨシなどに覆われていた。

ワンド内には湧き水が出ていた。川魚の繁殖地であり、仔魚たちの避難場所だった。アユ釣り舟の川港で

あったし、高齢者たちが冬期に寒バエを釣る場所だった。堤防の地先には蛇籠などによる護岸工事が施されているらしいのだが、それは竹林の中に埋もれていて目立つような存在ではない。自然のビオトープの風景だった。

このお釣土場下流半分のワンド周辺は、上流半分の水辺公園と違って、近年はまったく公的管理の手が入っていなかった。釣り人たちも獣の一種に数えていたのだが、堤防の竹林にも川原のブッシュにも獣道があるだけで、上流の近自然公園の園路に相当するものは一切なかった。釣り人たちが時々草刈りをしては獣道を確保するだけで、あとは自然の遷移にまかせてきた。夜は小動物の世界でもありそうな、野性的な川の風景だった。

私たちは、お釣土場上流半分の水辺公園を「近自然管理区域」と呼び、下流側半分のワンド付近を「放置管理区域」と呼んでいた。

近自然管理区域が人の観賞対象の植物・虫・野鳥の静的世界であるのに対し、放置管理区域は人・小動物・魚類・両生類などが競合する動的世界であると思われた。前者が人に支配されているのに対し、後者は神の意思のような自然の遷移によって支配されてきた。

お釣土場のワンドは、昨年9月12日の記録的な大洪水の際に膨大な量の流砂の下に埋まり、砂丘になってしまった。さらなる遷移を待って放置すればいいのか、ワンドの復活を河川管理者に陳情すべきか。川の人々はそんな哲学的思索を続けている。放置管理区域の絶妙な自然の存在が近自然公園の価値を高めていたであろうが、その事実が河川管理者や研究者に認知される前にワンドが消滅したのは、不幸なことだった。

豊田都心の近自然型・見ノ口公園内にある五六川という人工の小川の一画が放置管理されていて、そこにゲンジボタルが大発生し、今年6月いっぱい、都心の市民が近自然型に整備された園路からホタルの観賞を楽しんだ。近自然管理と放置管理の相互補完的関係がわかってきたような気がした。矢作川本流の事例をさらに考えてみたい。

(にいみ いくお、矢作川漁業協同組合 専務理事・豊田市矢作川研究所 事務局長)

平戸橋周辺の自然観察(3)

山原勇雄

東海地方で昨年9月11日深夜から翌朝まで降り続いた雨の量は年間降水量の1/3に達し、愛知県の各所で水地獄を体験しました。ふだんは優しい自然も一度機嫌を損なうと恐ろしい状況になります。しかし、この自然環境の悪化を招いているのは他ならぬ人間自身であり、そのことを意識して、改善のための努力を惜しまないようにしなくてはなりません。

あの東海豪雨の1週間後に平戸橋自然観察「草だらけの会」の例会があり、荒れ果てた矢作川の川岸の自然観察を行いました。平戸橋西詰の橋の下を通り抜ける遊歩道は、前日の下見で流木、倒木、土砂



ハコベ (藤井泰雄氏 撮影)



ヒロハタンポポ (田中 蕃 撮影)

崩れ等により通行不能なことが分かっていたため、右岸の道を通って大砂丘と化した越戸公園に向かうコースをとりました。

さて、あれから9ヶ月が経過した後(2001.6.4)、久々に同じ場所に立ち入ってみました。平戸橋いこいの広場入口道路東側(平戸橋一区公民館北側)より矢作川右岸の竹藪に入りました。

公民館に向かう歩道から川岸への斜面は市の委託業者によってでも草刈りが行われたのか、きれいに草が刈り取られていたので藪こぎをせずに斜面を調査できましたが、植物を観にきた者にとっては少々淋しくもありました。草刈り跡から生え始めた植物はタンポポ、カラスビシャク、イノコズチ、オオバコ、スイバ、カタバミ、オニタビラコ、ハコベ、コナスビなどでした。

* つづく *

(やまはら いさお、平戸橋自然観察『草だらけの会』)

筏下り・歩け歩け・矢作川クリーン作戦

—— 筏下りに新しい動き ——

藤井泰雄

5月13日、快晴に恵まれた日曜日、矢作川筏下り大会が開催された。今年で15回目を迎えるこの大会は、豊田市の市街地に近い矢作川の、初夏の風物詩として多くの市民に親しまれ、定着している。今年参加した筏は、不景気の世情を反映してか、77艘・501人で昨年と比べて減ったが、陸からの応援、見物の人是非常に多く、橋の上は、特別の見物スポットとして超満員であった。

多勢の人がドーッと寄って来て、終わったらサーッと散っていくのが見慣れたイベントの風景だが、今年は一味違うグループが出現した。題して「筏下り、歩け歩け、矢作川クリーン作戦」。実行したのは日本発条(株)豊田工場のグループ約50人、私が定年を迎えた会社の人たちだ。「去年までは2艘の筏を出していたが、今年は1艘に減らして代わりに矢作川河川敷のゴミ拾

いをすることにした」と説明してくれたのは工場長のMさん。昔から知っている懐かしい人だ。ISO9001からISO14001認証取得活動を経て、みんなの意識が大きく変わった、工場長と話していてそう思った。



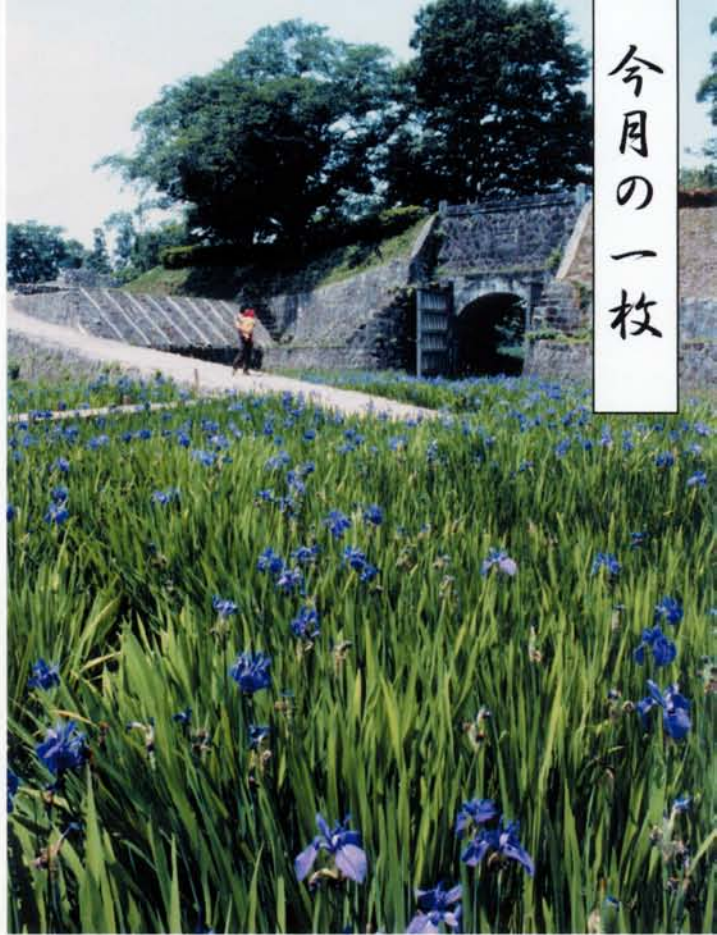
日本発条(株) 提供

筏が出発した後、リーダーが大声を出して説明をする。3人1組になって1人は火挟みを持ち、2人は燃えるゴミ、燃えないゴミを入れる袋を持つこと。コースは古単水辺公園を出て平戸橋を渡って右岸へまわり、胸形神社のところから河川敷へ降りて、下流籠川合流点まで約4キロの道のりだ。小学生も混じっている。私に「一緒に歩こう」と声をかけてきたK、新入社員の頃のどうしようもないやんちゃ坊主が、今では、仕事でも遊びでも立派なリーダーに成長している。

平戸橋から籠川は、役員として私が担当する漁業組合支部の管轄区域で、途中私が住む町内も入っている。昨年の洪水のこと、お釣土場水辺公園のことなど話しながら歩くうちに籠川につきあたる。荒井橋を渡って国道から右へ坂道を下ると工場の裏口だ。みんなが持っているゴミ袋がずっしりと重そう。集めたゴミは社内の決まりに沿って処理するという。

筏下りと河川美化活動をセットにした動きは、過去14年に例を見ない。これをきっかけに、各グループの参加の形に変化が生じることを期待したい。

(ふじい やすお、矢作川漁業協同組合平戸橋支部 支部長)



初夏のどうと貯木場
横井恭夫氏
撮影

研究所の 調査風景

5月31日(木)

太田川で多自然型川づくりの生物事後調査を行いました。豊田市東部ではこの春にマイマイガの幼虫が異常発生しており、太田川の川辺一帯でも草木に鈴なりのごとく至る所、毛虫だらけでした。水生生物の調査でヤゴや魚をわらって水際にたも網を入れようとしたとき、まず、たも網が水際の草にふれるだけで数匹の毛虫が採取されました。背丈ほどに伸びたヨシ類にびっしり毛虫がたかっている場面では、調査意欲は消失

し、気持ち悪さに身震いして思わずたも網を投げ出していました。マイマイガ幼虫集団の威力は恐るべし! (内田)

6月11日(月)

古単プロジェクトでは今年度より実験水路(研究所近くの緑陰歩道の水路を利用)で、アユの摂餌実験(アユは矢作川の藻類が好きか嫌いかを調べる)を行います。この日は天然アユ調査会の方に手伝ってもらい、実験に用いる石に

藻類を付けるため、矢作川に沈める作業を行いました。15cmぐらいの玉石を丈夫な金網に挟み込んで動かさないようにします。これを1ヶ月沈めておいてアユの餌となる藻類を生やします。去年のような大水が出ると金網ごと流されてしまうかもしれないので、しばらくは極端な大雨のないことを祈ります。(山本)



石の設置作業

編集後記

昨年9月の豪雨の影響か、はたまた濁水の影響か、今年はアユの遡上量が少なく、アユ釣りの解禁日も7月14日に延期されました。今年の矢作川のアユを取り巻く状況は、一段と厳しいと言えそうです。

さて、Rioでは先々月のカラー化に伴い、内容も刷新していこうと画策中です。矢作川に関わるより多彩な研究や、人々の活動を紹介していければと思っています。Rioへの執筆を希望される方は、お気軽に研究所までご連絡下さい。(洲)

ご意見・ご感想をお寄せください